
愛の名の下に

echo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛の名の下に

【Nコード】

N4406Q

【作者名】

echo

【あらすじ】

——もしも、偽りの生を愛する者がいたとしたならば、その愛もまた偽りのものとなってしまふのだろうか？

小さい頃から私は人形遊びが大好きだった。母が買ってくれた小さな人形、私はいつも人形と一緒にだった。友達と遊ぶ時も、ご飯を食べる時も、勿論寝る時も。その人形は大事な友達だった。そんなある日、不思議な事が起きた。今まで話しかけても返事一つしてくれなかった人形が、向こうから話しかけてきてくれるようになったのだ。私たちは直ぐに親友になった。直ぐに新しい友達を他の友人や母に紹介した。皆、喜んでくれると思っていた。新しい友人を暖かく迎えてくれると思っていた。しかし、現実は違った。皆が私に侮蔑の眼差しを向けた。友人は私の事を嘲笑し、離れていった。母は汚れたものを見るような目を私に向けた。でも、私はいつも親友が近くにいたから寂しくなんてなかった。部屋に閉じこもって親友とずっと話をしていた。楽しかった。嫌なことや時間を、すべて忘れてしまえるほど楽しかった。

あれから何年の月日が経ったのか、私には分からない。あの時私を嘲笑った友人たちが今何をしているのか、私を捨てた母が何をしているのか、私には分からない。それでも、一つだけ確かな事があった。

——私は、今でもその人形を大事にしている。



煌びやかに差し込む陽光。鬱蒼と茂る薄暗闇の森の風景に慣れていた視覚には強烈すぎる刺激を、反射的に目を細め、眼前に片手を翳して庇を作ることと緩和する。突然の出来事に何が起きたのか瞬時には理解出来なかったが、光に慣れて機能を取り戻した瞳で周囲を見渡してみれば、どうやら森の中にぽっかりと開けた空間に出たらしい。小学校の校舎一つくらいなら丸々入りそうな広い空間には

視界を埋め尽くすかのように鮮やかで毒々しい赤の彼岸花が咲き乱れて風に揺れ、その中央には古びた洋館が鎮座していた。それこそドラマや写真でしか見たことのない、赤レンガで出来たゴシック調の洋館。窓のガラスは悉く割れ、茶色に枯れ果てた蔦の残骸が纏わりついている様子は他者を寄せ付けない雰囲気周囲に発しており、なるほど夜に訪れればこの場所は立派な心霊スポットと化すに違いなかった。

「……やっと着いた」

漸く到着した目的地。長い探検に少しだけ乱れた息を整えつつ、安堵の息を小さく吐いて腕時計へ目を落とす。現在の時刻は一時十五分。車を降りて森に入ったのが十二時を少し回ったところだったのだから、正味一時間ほど森を歩き続けた計算になる。斜面を歩いている訳では無いのだから肉体的な疲労はさほど大きくない筈なのだが、昼間であるのに日の差し込みぬ昏き森はまるで俗世からの来訪者を拒んでいるようでもあり、延々と同じような景色が続く中を自身の感覚だけを頼りに歩くのは殊更多くの精神力を必要とした。今の今こそ心は目的の地に辿り着いた喜びに満ちているが、帰りも同じルートを通して帰る事を考えると否応なしに憂鬱な気持ちにさせられる。そんな気持ちを振り払う為にピシヤリと軽く頬を張ると、目の前広がる赤い絨毯、鮮血の溜まった湖の中へと歩を進めていった。



——ふと、耳に鈴の音が響く。

それは久しく聞くことのなかった音。それは男の住まう館の領域内に何者かが侵入したことを知らせる音だった。

男は肩に寄り添う女の髪を撫で梳いていた手を止め、閉じていた瞼をゆっくりと持ち上げる。最後にこの目を開いたのはどれほど前のことだっただろうか。薄汚い俗世を視界に入れぬよう、瞼と心を

閉じてしまったのはいつのことだっただろうか。瞼を持ち上げる一秒にも満たない時間、彼の脳裏を様々な過去の記憶が水泡の如く浮かんでは儚く消えていった。

「どうやら客人が来たようだ」

抑揚のない静かな声。いつもの声色に少しだけ嬉しそうな響きが滲んでいたのを感じ取ったのか、隣にいた女が彼にしか聞こえぬ声で耳元に何かを囁く。

「……ああ、そうだ。偶には客人をもて成さんとな。久し振りに子供達の様子も見ておきたい、という理由もあるがね」

招かれざる客人がこの館を訪れることは時折あったが、普段は一切無視している彼らを”もて成そう”などと考えたのは今回が初めてだった。極度の人嫌いである自分がそのような社交的な行為を行うのは普段では考えられないことだったが、それは今回の来訪者が己を楽しませてくれるというある種の予感めいた感覚のせいなのかもしれない。

「では、私は先に行っているよ。君も、もし良かったら後で来てくれ。共に客人をもて成そうじゃないか」

男は腰かけていた椅子から身を起こす。部屋から出ようと扉を開ける男の背中に、背後から女が彼にしか聞こえぬ声で何かを語りかけた。男はそれに笑みを返し、眩しい陽光の差し込む廊下へと歩みを進めていく。そして、男がいなくなり扉の閉じた部屋には再び闇が満ちる。蝋燭やランプの光の一つすらない漆黒の中、中心には対になった木製の椅子。先ほどまで男の座っていた椅子の隣では、同じような椅子の上で、純白のドレスで着飾った少女の人形が光無き眼で男の消えた扉を見つめていた。



「お邪魔します」

廃墟の洋館の入口まで辿り着くと、蝶番が外れ、不安定に揺れる

扉をそつと押して中へと入っていく。人が住んでいる筈のない家に入るというのに機嫌を窺うように挨拶の言葉を発してしまったのは、それ程までに異様な雰囲気を感じ取ったからなのかもしれない。事実、洋館に入る前から感じていた皮膚に纏わりつくような寒気は中に入って一層強さを増したようだった。これは本物かもしれない、との考えが脳裏を過ぎる。最近はスランプ続きのために会社で肩身の狭い思いをしていたが、今回は秀逸な記事が書けそうな予感がしていた。そして早速内部の様子を記録していこうとするも、いつもポケットに入れている筈のメモ帳とペンはいくら探しても見つからない。

「あれ、車に置いてきたかな。……ま、いいや」

さすがに今から車に戻り、もう一度この場所に来る気力も度胸もない。取り敢えず頭の中に記録しておいて後で思い出そう、と大して迷うことなく決めた。我ながら、こういう時の思い切りは良い方だと思っている。

改めて周囲を見渡せば、ここが豪勢な屋敷である事は容易に理解出来た。今自分が立っている入口から見て、正面には二階へと続く階段、左右に長く伸びた廊下には幾つもの扉が付いている。外観から推測するに二階も同じ構造なのだろう。少し首を捻って思考を巡らせた後、まずは館の一階右翼の探検を開始することにした。

歩を進める度、板張りの廊下はギシギシと不気味な音を立てる。陽光が差し込む時間帯だからこそ出来ることではあるが、これが光のない夜の探検だったならば、押し寄せる恐怖に五分と経たぬ内に逃げ帰っていることだろう。廊下の壁に整然と並んだ扉の全ては固く閉じられており、そこから何か得体のしれない恐怖が滲み出ているような気がして、扉から距離を取るように廊下の端をゆっくりと歩いていく。

そうして辿り着いた右翼の一番端の部屋。そこだけ壁の間隔がやけに長く、どうやら他の部屋より広くなっているらしい。その部屋だけ扉は完全に開いていたのだが、窓に遮光カーテンが引かれている

らしく中は真っ暗であり、廊下からの光も内部までは届いていない。その、何も見えない闇の空間に心が惹かれていた。そして心惹かれるまま、好奇心が求めるままに暗闇へと向けて歩みを進め、廊下よりも更に少し温度が低く感じられる部屋の中を手探りで恐る恐る進んでいく。幸い進路には何もなかったようで、すぐに部屋の反対側へと辿り着いた。そして次に壁伝いにカーテンを探し、それらしい厚手の布を掴むと力任せに引っ張る。長い年月の中で脆くなっていたカーテンは根元から音を立てて破れ落ち、闇に塗り潰されていた部屋は窓から差し込む陽光に照らされていく。

部屋の中には何体もの人形があった。少女の体を模したものが三体、床に座り、壁に寄り掛かる様にして此方を見ていた。彼女たちの眼窩に詰められたガラス玉の目が日光を反射し、まるで彼女たちが生きているかのような錯覚を与えてくる。その他に床に乱雑気味に置かれているのは、剥き出しの少女の下半身だけが二つ繋ぎ合わされたもの、男性と女性の上半身が繋ぎあわされたもの、円錐に大小無数の乳房が生えているもの、そんな歪な人形たち。どうやら一般的な人形と違って関節が球体となっているらしく、腕や足が現実ではありえない方向に曲がっているものもあった。

ここにあるのは人であり、人ではないもの。完全であり不完全。整であり歪。陽であり陰。相反する二つを内包する眼前の光景は、不気味で、生々しく、しかし何処か扇情的であった。

——壊してしまいたい。穢してしまいたい。ふと、そんな感情が芽生えてしまう程に。

改めて五体満足の三人の少女たちを見る。彼女たちは侮蔑と恐怖の入り混じった表情を向けていた。表出した獣欲を蔑み、自らが穢されることを恐れ、嫌悪していた。内に秘められていた嗜虐心が加速する。少女の一人に近づき、彼女の着ている衣服を力任せに引き裂いた。驚きに目を丸くする少女、その首筋にナイフの刃を当てて引く。首には思いのほか深い傷が出来ており、そこからは真っ赤な鮮血が溢れ出していた。少女は狂ったように暴れて振り解こうとし

ていたが、上にのしかかって自由を奪い、その傷跡に口をつけて溢れる鮮やかな赤を啜る。濃厚な血液は直ぐに全身に回って活力となっていく。それは今まで味わったどんなものよりも美味だった。やがて、少女は静かになっていった。血の出が悪くなってきたので、ナイフを傷口に再び押し当てる。申し訳程度に滲んできた血液を下で丁寧な舐め取った。少女が掠れた悲鳴を上げた。もう一度深くナイフを刺し込んで深く肉を抉った。もう血は出てこなかった。少女の目は見開かれ、ガラスのような瞳がじっと見つめていた。半開きの口からは白くなった舌が垂れ下がっていた。



「……ねえ、大丈夫 顔色悪いよ」

声が聞こえた。いつの間にか閉じていた瞼を上げる。目の前にあったのは少女の死体ではなく、見慣れた女の顔。周囲には先ほどと変わらない人形たちの部屋。三体の少女の人形も変わらずに光の宿らぬ瞳で僕を見詰めている。血の匂い。掠れた叫び。白く垂れる舌。フラッシュバックする情景、競り上がってくる嘔吐感に口元を押さえた。

「大丈夫、少し目眩がしただけだから。それより瞳子、何でお前がここに」

僕の言葉を聞いた瞳子は眉根に皺を寄せ、これ見よがしに大きな溜息をついてみせた。

「さっきまで一緒にいたのを忘れたの 森でどんな先に行っちゃうから逸れちゃったんじゃない。やっと見つけたかと思えば、貴方は部屋の中でぼーっと立ってるしさ。何かあったのかと思って心配しちゃった」

憤慨しているかのような、呆れたかのような声。そういえばそうだった。今回は瞳子も連れてきていた事をすっかり忘れていた。

「……ああ、そうだった。ゴメン、先を急いでたから」

バツの悪そうな声を上げる。今回は完全に僕が悪い。瞳子が怒るのも仕方のない事だろう。

「まあ、いいわ。今回は許してあげる。それよりも早く帰りましょ。ここ、何だか感じ悪いわ」

そう言って瞳子は部屋に置かれた人形たちを気味悪げに見渡す。僕もそれには同感だった。ここは人が入ってはいけな所なのだ。残念ながら記事にすることはできないだろう。今日は諦めて素直に帰った方がいいのかもしれない。

「もうお帰りかね。折角の客人だ、もう少しゆっくりしていけばいいだろうに」

僕が同意の声を返そうとするのと、室内に低い男の声が響いたのはほぼ同時。部屋の入口にはいつの間にか一人の男の影があった。男は背が高くがっしりとした体つきで、ダークスーツに赤いネクタイを付けている風貌はこの洋館に不気味なほど似合っている。

「……どなたですか」

返す声にはあからさまな不信感が浮かんでいただろう。僕は咄嗟に瞳子の前に出て、彼女の体を自分の背後へと隠した。

「そう警戒する事もあるまい。別に君を取って喰おうなどとは考えていないのだから。それに私の家に無断で入った者が、主に何者か問いかけるのも些か失礼な話だとは思わないかね」

男は抑揚のない静かな声で語った。そこには怒りなどの感情は含まれていないのだが、室内に響く重低音は妙な重圧を与えてくる。

僕は返す言葉が見つからず、じっと男の顔を見つめていた。

「……ほう、君は。そうか、そういうことか。私は元来人間というものをも毛嫌いしているのだが、君とは分かり合えそうな気がするよ」
気難しげな顔で俺を見ていた男は突然そんな言葉と共に口元の筋肉を緩めた。気のせいかもしれないが、僕を見る目に少しだけ親しげな色が浮かんだような気がする。そうして初めて男の視線が動き、背後にいる瞳子の姿を捉えた。そこで初めて彼女の存在に気付いたようですらあった。

「この男はお前の恋人か」

男の眼に宿る闇が濃くなった。背中では緊張した瞳子が僕の服の裾を強く掴むのを感じる。

「そうよ、彼は私の大事な恋人」

凜とした声が室内に響く。その瞳子の答えを聞くと、男はもう彼女から一切の興味を失ったようだった。視線は再び僕を捉え、身を引き裂かれてしまいそうな程の鋭い眼光は直ぐに鳴りを潜める。服の裾を掴んでいた瞳子の手の力もそれと同時に緩み、背後から小さく息をつく音が聞こえた。

「ふむ、自己紹介がまだだったな。私はこの館に住む人形師、名前は必要がなくなった故に棄てた。名を呼びたければ好きに呼んでくれて構わん」

「人形師？　なら、これもあなたが作ったんですか」

僕は周囲に置かれた人形たちを指差す。男は一体の少女の人形へと近づき、髪にそっと触れた。

「そうだよ。皆、私の可愛い子供たちだ。――すまないね、寂しい思いをさせたらう。ああ、後で一緒に遊ぼうな」

男が少女の人形に語りかけ、愛おしそうに髪を撫でる。そこにあったのはどこにでもある優しい父の姿。だが、それは違う。彼が会話を交わし、撫でているのは人ではない。人の体を模したものでしかないのだから。

「好奇と侮蔑の混ざった眼差しだな。おかしいと思うかね？　蔑むかね？　人形と会話をする私を、人形を娘のように扱う私を」

人形から手を離れた男がこちらを凝視している。漆黒の瞳で僕の心の内を見透かそうとしていた。僕は言葉を発しなかった。いや、何を言えばいいか分からなかった。しかし、男は僕の言わんとする事を表情から読み取ったようだった。

「信じられないかもしれないが人形は魂を持つ。……いや、魂を宿す人形もいる、と言った方が正確なのかもしれないが」

「……そんなこと、有り得るはずがない」

緊張に強張った声帯を震わせ、何とか掠れた声を絞り出す。妙な緊張が全身を包み込んでいた。本能が話の続きを聞くことを拒絶し、好奇心は興味を示す。この部屋に入る時と同じだった。男はそんな葛藤など知らずに話を続けていく。

「ならば、説明しよう。人間は誰しもが自らの中に異性的な部分を持ち合わせている。男性の持つ女性心理をアニマ、女性の持つ男性心理をアニムスと呼ぶが、人形愛のそもそもの根底にあるものはこれだ。己の心の内に根差すアニマを”人形”という名の他者に投影させる。そうすれば望む形の異性が他者という形態を取って目の前に現れる事となる訳だ」

身振り手振りを加えながら男は持論を展開していく。興奮してきているのだろう。段々と声は大きくなり、声にも聞き取りやすいよう抑揚が付けられ始めていた。僕も瞳子もその迫力に圧倒されて口を挟む事が出来ず、ただ男の語る話に耳を傾けることしか出来なかった。少しだけ、瞳子の裾を掴む手の力が強くなった気がした。

「だが、これはあくまで理想の人間関係を自己完結させているに過ぎない。意識のベクトルは常に自分の内面を指しているだろう。言ってしまうえば只の妄想の産物だ。それは人形が魂を宿しているのではなく、人形が魂を持っているように自らを騙しているだけ。人形は”己の中にもう一人の自分を形成するための種子”に過ぎず、一度それが萌芽した後は単なるオブジェにしか過ぎなくなる」

男は一旦言葉を切る。ここまでは前置きであり、これからが本題なのだ。彼の漆黒の瞳が告げていた。僕の体は小刻みに震えていた。何かを恐れるように、何かを拒絶するように。しかし声帯は再び錆びついて声を出すことは出来ず、何故か体を動かす事すらもできない。男が再び口を開いた。

「だが、私は違う。私の愛する者たちはそれぞれが独自の自我を有している。それは決して私のアニマの投影ではない」

人形師は”娘”たちに視線を送り、微かに頬を緩めた。彼の目には、天使のように笑う子供の姿が映っているのだろうか。

「我々は成長する内に多くの異性的心理を失っていく。男性はより男性らしく、女性はより女性らしくなる為に段階的に切り離していくのだ。そして切り離されたそれらは心の深淵へと沈んで消えていくのだ。本人の知らぬ間に、な。だから私は意識的に私の中に眠るアニメを切り離し、その断片を私の作った人形に与えたのだよ。本来ならば、切り離されたアニメは人形に馴染むことなく消えるだろう。だが、それを人形自身の魂として定着させる方法がある」

再び男は人形の髪を撫でた。それは父から子への、愛を込めたスキニシップ。一瞬、人形の少女がくすぐったげに目を細めたように見えた。他の少女たちが、父の愛を受けている少女に羨ましがな瞳を向けていた。これも、きっと錯覚。そんな目一杯の間において、男は話を再開した。

「――話しかけるのだよ、まるで相手人間であるようにな。人形をもう一人の自己を表出させるための媒介に使うのではなく、一人の人間として愛する。さすれば程無く人形は錯覚を起こし始めるのだろう、”自分は人間なのではないか”と。その瞬間、単なる残滓に過ぎなかったアニメの断片は新たな自我へと変容し、人形は魂を得て人間となる。アニメが消失するのが先か、新たな自我が芽生えるのが先かは分からないがね」

男の話はそれで終わりのようだった。人形を人間にする為の方法。そうやって彼は人形たちに魂を与えたのだという。到底信じられない話だった。彼の語る方法を試したところで到底人形が魂を得るなどとは思えない。そんなのは妄想だ、と一笑に付してしまえばそれで終わり。だというのに、たった一言で済む話なのに、僕はその言葉を言い放つ事が出来なかった。

「それは違う。そんなの、人間じゃない」

ようやく紡げたのはそんな言葉。人間と魂の宿る人形、両者の違いが何なのかは分からない。もしかしたら違いなどないのかもしれない。それでも、僕は魂を得た人形を人間だとは認めたくなかった。何故か、心が少し痛んだ。

「……そうか、理解が得られなかったようで残念だよ。君とは良き友人になれそうだったのだがね」

男は残念そうに頭を左右に振る。自身の考えが否定されても、彼が気分を害した様子は見られなかった。寧ろ、悲しみや憐憫に近い表情で僕を見ていた。人形について語る時の果てなく深い狂気と闇を内包していた爛々と輝く眼は、最初の無感動なものに戻っていた。人形みたいな目だな、と僕は思った。

「そろそろ帰ります。今日は勝手に邪魔して済みませんでした」
軽く頭を下げる。先ほどから吐き気と寒気がしていた。風邪でも引いたのだろうか。どちらにせよ、早く帰るに越したことはないだろう。余りこの館に長居はしたくなかった。人が住んでいる場所なら当然心霊スポットとして記事にすることもできない。それで風邪まで引いてしまったら、それこそただの馬鹿としか言いようがないだろう。

「気にすることはない。私も久々に人に会えて嬉しかったのだからな」

その言葉に偽りはないようだった。僕はもう一度小さく礼をし、部屋の出口に向かって歩みを進める。

「ああ、そうだ。帰る前に一つだけ質問があるのだが、時間はあるかな」

背中にかかる声に僕は足を止めた。出来れば断って帰りたいかったのだが、不法侵入をしてしまった負い目もある。振り返って再び男を視界の中に収めると、無言のまま視線で相手の次の言葉を促す。

「先程君の後ろにいた女、あれは本当に君の恋人か」

「どういことですか」

思わず聞き返していた。そういえば周囲を見渡しても瞳子の姿はない。先に部屋から出てしまったのだろうか。

「言葉のままの意味だよ。彼女は君の恋人なのか、と聞いているのだ」

「そうです。瞳子は僕の恋人です」

その質問ならば瞳子が既に答えた筈だった。何故もう一度聞くの
だろう、と疑問に思いつつもその質問に答えを返す。

「そうか。ならば彼女と初めて出会ったのはいつだ」

覚えていない。瞳子は気付いた時には近くにいたと思う。僕たち
は”幼馴染”という関係なのだと瞳子が言っていた。

「彼女の年齢は？ 恋人ならばそのくらい知っているだろう」

答えを返さぬ僕に、男は問いを重ねる。こんな質問に何の意味が
あるというのだろうか。吐き気や寒氣に加え、頭の奥に微かな鈍痛
が走る。その痛みの所為で僕は瞳子の年齢を思い出す事が出来な
かった。

「確か瞳子といったな。彼女の名字は何というんだ」

瞳子は瞳子だ。名字なんてあってもなくても変わらない。だから
覚えていない。繰り返される無意味な質問に段々と苛立ち、鈍痛は
その痛みを増していく。

「これで終わりだ。余計な時間を取らせて悪かった。……具合が悪
そうだな。家に帰り、ゆっくり休息を取るといい。私も娘たちとの
会話に花を咲かせたいのでね」

浮かべた笑みは優しき父のものであった。僕もせめてもの礼儀と
してぎこちない笑みを返すと、よろめく足取りで部屋の出口へと向
かう。鈍痛は確かな痛みとなって体を苛み、吐き気と寒氣は限界ま
で高まっていた。視界に白く靄がかかり、周囲の景色をはっきりと
見る事が出来ない。そんな覚束ない足取りを見かねた男が肩を貸し
てくれ、何とか廊下まで辿り着く事が出来た。

「当然の話だが、魂を持った人形に両親などいない。年齢などない。
与えられない限りは名前や名字を持つはずもない。それだけは、言
っておこう」

去り際に男はそう言い残し、僕の背後で扉が閉まる。男の残した
言葉の意味が僕には理解できなかった。いや、理解したくなかった
のだと思う。程無くして聞こえてくるのは男と娘たちの声、ありふ
れた父親とありふれた娘たちの交わすありふれた談笑。久々の再会

を果たした父と子の間には積もる話も多々あるのだろう。少し頭痛が酷くなった。

「あら、もうお帰りになられるの。……調子が悪そうね、大丈夫？何か薬でも持って来ましょうか」

また声が聞こえた。瞳子？ いや、瞳子の声ではない。霞む視界の中に純白のドレスが見える。また頭痛が酷くなる。瞳子は何処。世界が揺れて、反転する。もはや自分が立っているのか倒れているのか分からない。瞳子はどこ。自分が何処にいるのか分からない。自分が誰なのか分からない。思考にノイズがかかる。何も考えられない。とうこはどこ。とうことうことうことうことうことうことうことうことうこ。そして僕の意識はぷつつりと途切れた。



目を開き、最初に眼前に広がるのは見慣れた天井。僕はどうやら自宅のベッドの上で寝ているらしかった。部屋に差し込む紅色の光で今が夕方であることも分かった。どうしてこんな時間に寝ていたのかは忘れてしまったが、酷く寝汗をかいている以外、特に体に異常は感じられない。何か悪夢を見ていたような気がするのだが、詳しい内容までは思い出すことができなかった。

ふと、何者かの気配を感じて顔を横に動かす。ベッドの脇には椅子に座って静かに寝息を立てている瞳子の姿があった。看病をしていて、そのまま寝てしまったのだろう。その頬に触れようと身体ごと腕を彼女の方に伸ばす。そんな時、彼女の腕が目に入った。椅子に座った膝の上に丁寧に置かれた両手、その片方の服の袖が捲れ、ほっそりとした手首が露わになっている。本来ならば腕から滑らかな皮膚が続いている筈のそこには、球状の関節が付いていた。頭の中にフラッシュバックする情景。忘れていた筈の悪夢の記憶が鮮明に脳内へ再生される。

「何なんだよ、お前は！」

気付いた時には瞳子ごと椅子を横に引き倒していた。床に倒れ、突然の状況に驚いて目を見開く彼女の上に馬乗りになる。

「なあ、いつから僕たちは恋人同士になったんだ。何で恋人同士になったんだ。いつからお前は僕の傍にいるんだ。どうして俺はそれを覚えていないんだ……何か答えろよ！」

瞳子は振り上げられる拳を前にしても何も答えず、一切表情を変化させなかった。僕はそんな彼女に恐怖に近い感情を抱き、振り上げていた拳を頬に向けて思い切り振り下ろした。

「何なんだ……。お前は何なんだよ！」

手ごたえがない。確かに頬を思い切り殴りつけたというのに何か柔らかいクッションを殴ったような感触しかなく、当然瞳子も痛がる素振りは一切見せない。先程までと変わらず、まるで人形のような無感動な瞳で僕を見つめていた。押し寄せる恐怖に僕は絶叫した。絶叫しながら何度も何度も彼女の頬に拳を叩き込んでいく。

それから一体何発の拳を打ち込んだだろうか。眼前には傷一つ受けていない瞳子の姿があった。彼女は殴られている間一つの声も上げず、ただ僕の顔をみつめているだけだった。乱れた息を整え正気を取り戻し、改めて彼女の手首を見ると、それは何の変哲もないほっそりとした女性の手首だった。何処にも僕が見た球体関節など存在していない。そこで僕は初めて、自分が取り返しのつかない事をしてしまった事に気付いた。慌てて彼女の上から体を退かすと、壁に力なくもたれかかって腰を下ろす。

「……ゴメン。何だか悪い夢を見ていたようなんだ」

今更謝っても遅いだろう。幾ら彼女が傷一つ受けていないとはいえ、激情の余り大事な恋人に暴力を振るってしまったのは事実なのだから。

「ねえ、私、高校の頃は英語が得意だったのよ。貴方は？」

しかし、瞳子は僕を責めたりしなかった。上半身を起こし、脈絡のない質問を投げ掛けてくる。彼女の瞳にはいつもの慈愛に満ちた

光が戻っていた。

「……思い出せない」

せっかくの質問だというのに、僕は満足な回答を返す事が出来なかった。高校の時自分が何をしていたのか、幾ら思いだそうとしても何一つ浮かんでこなかったのだ。

「そうよね、仕方ないわ。何年も前の記憶なんてすぐに忘れちゃうもの」

瞳子はゆっくりと立ち上がり、服に付いた埃をはたき落とす。そして壁にもたれる僕の方へと近づいてきた。

「それなら、もっと簡単な質問に変えてあげる」

彼女は僕の目の前に立っていた。口元にこそ人懐っこい笑みを浮かべたままだったが、その目にはあの人形師と同じく、全てを飲み込んでしまうような闇が渦巻いている。

「昨日の夕飯、何を食べたっけ」

分からなかった。たかが昨日の事だというのに僕は思い出す事は出来ない。そもそも僕は夕飯を食べたのだろうか。昨日は一日何をして過ごしていたのだろうか。

「貴方の誕生日はいつだか分かる？」

分からなかった。自分の誕生日はいつなのか、そもそも今まで何度の誕生日を迎えたのか、それすら分からない。自分がこの世に生を受けたのが一体いつなのか分からない

「貴方の母親の名前は？ 家族の名前を一つでも挙げられるのかしら」

分からなかった。母の名前も父の名前も、何もかも。何人家族だったのか。どんな家庭環境だったのか。父や母という存在がいたのかさえ、今の僕には分からない。

「どうしたの、さっきから黙ったままじゃない」

「違う。違うんだ……今は頭の中が混乱してるだけで」

そう、今は何かしらの理由で思い出せないだけ。もう少しして落ち着けば全てを思い出せる筈なのだ。僕は縋るような思いで頭上の

瞳子を見上げる。

「あら、そう」

そんな僕の思いを彼女は一蹴した。そして膝を屈め、項垂れる僕の顔を覗き込んでにっこりと笑う。まるで天使のような笑みだった。だが、その目に宿るのは漆黒の闇。

「――なら、貴方のお名前は？」

即座に答えを返そうと口を開き、そのままの体勢で止まる。僕は自分の名前すら言う事が出来なかった。言葉の代わりに目から涙が溢れて頬を伝う。

「そうだよ、分かる筈ないよね。……ゴメンね。虐めるつもりはなかったんだけど、貴方がいきなり殴ったりするんだもの。悪い事する子にはお仕置きをしなくちゃいけない。そうでしょ？」

「僕は……僕はいったい何なんだ……」

頭が痛い。心が痛い。僕は頭を抱え込み、ただ震えることしか出来ない。どうして僕は何一つ思い出す事が出来ないのだろう、どうして僕は何一つ分からないのだろう。ついさっき瞳子に向けて言ったのと同じ言葉を、今度は自分自身に向けて何度も呟いた。

「貴方は私の全て。大事な家族、大事な友人、そして大事な恋人なのよ」

彼女が耳元でそっと囁く。その甘美なる言葉に、僕の感じていた痛みが段々引いていくのを感じた。

「……おかしくなったのは僕なのか？ それとも……」

瞳子は真っ直ぐ伸ばした人差し指を僕の唇に当てて制した。もう何も言わなくていい、彼女の慈愛に満ちた瞳はそう告げていた。

「私も貴方も何も変わっていない。昔からこうだった。……そうね、貴方がちよつとだけ聡く成り過ぎただけなの。記憶なんていらぬ理性なんていらぬ。だってそうでしょう 貴方には私しかないし、私にも貴方しかない。他のものなんて何にも必要ない。私たち二人で本能に溺れて、永遠に愛し合っていけばいいの。貴方は何も考えなくていいのよ」

そう言つて彼女は僕の頭を正面から抱き込むようにそつと包んだ。柔らかな抱擁の中、仄かな石鹼の優しい香りが鼻孔をくすぐる。それだけで僕の感じていた不安や痛みが全てなくなっていくのを感じた。全身が火照つて熱を持ち、今にも溶けてしまいそうになる。

「……僕のこと、愛していますか？」

熱に浮かされ、愛しき人の胸の中で僕は尋ねた。

「もちろんよ。貴方を愛しているわ……壊しちゃいたいくらいに」
言葉は鼓膜から脳へと伝わって全身を麻痺させる。瞳子は僕の体を一層強く抱きしめる。それだけで彼女の想いが伝わってくる。もう、何もかもがどうでもよかった。もしも僕が偽りの生だとして、その偽りの生を愛する者がいたとしたならば、その愛もまた偽りのものとなってしまうのだろうか。

「だって貴方は、——貴方は私の可愛い可愛いお人形さん」

彼女の手が僕の髪を梳く様に優しく撫で上げる。それは聖母のように全てを包み込むが如き慈悲に満ち、淫魔のように全てを溶かす快樂を持ち合わせた手つきだった。僕と彼女の体は燃え上がる体温でどろどろに溶け、混ざり合う。細胞の一つ一つまでもが結びつき、互いの想いを確かめ合う。どこまでが自分で、どこからが自分でないのか、それすらも分からない混沌とした世界。そこでいつまでも愛する人のことを考えながら、

——どこまでも、堕ちていこう。

(後書き)

昔に書いたもの、その二。
これも二年ほど前のもの。冗長な表現が多いですね、特に序盤。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4406q/>

愛の名の下に

2011年1月27日17時55分発行